

藤沢は、江戸時代の国際交流の舞台 ふじさわ宿交流館と「朝鮮通信使」

日本と韓国・朝鮮の歴史

歴史に登場する日本と韓国・朝鮮の歴史というと、
どんなことが思い浮かぶでしょう。

「秀吉の朝鮮侵略（文禄・慶長の役）」

「征韓論」

「韓国併合」

けっして明るくはない話題が浮かびます。

もちろんどんなに厳しくても、私は日本による「侵略」の歴史を否定してはならないと思います。事実を直視しなければ、また同じ過ちを繰り返すことになるからです。

ただ一方、つらく厳しい歴史を並べただけで終わっては、未来に向けた展望を拓くのも難しくなります。また気をつけなければ、韓国・朝鮮はいつも侵略をされている弱い国、という誤った印象を与えかねません。

韓国・朝鮮は、ゆたかな歴史と文化を持つ国です。古代には朝鮮半島からおおぜいの人々が進んだ大陸の文化をたずさえて日本列島に渡ってきました。朝鮮からの文化の伝来がなければ、日本の文化も成り立ちませんでした。

日本と韓国・朝鮮の間には、たくさんの人々の交流やつながりがありました。けっして侵略や対立だけの歴史ではなく、平和で友好的な時代もたくさんあったのです。そのことも忘れてはならないと思います。

朝鮮通信使

「鎖国」の時代というとき、日本はオランダと中国以外の国とは国交がなく、貿易も行っていなかったと思われがちです。

これも大きな誤解です。鎖国の時代であっても、貿易どころか正式な外交関係を継続していた国がありました。

それは朝鮮です。

釜山には倭館という日本人居留地が設けられ、ここを拠点に対馬藩を窓口とした外交・通商がさかに行われていました。

また将軍の代替わりなどの際には、朝鮮王朝から江

戸幕府に慶祝のための外交使節団が送られてきました。それが「朝鮮通信使」です。

「通信」とは「信義を通い合わせる」という意味で、1607（慶長12）年から1811（文化8）年までの間に12回の通信使が来訪しました。



▲羽川藤永「朝鮮通信使来朝図」

使節一行と随員の日本側関係者は

総勢500人を越えました。当時の人々はめったに見ることのできない荘厳な異国の行列を、たいへんな関心で迎えました。

この12回のうち、9回の通信使は藤沢に宿泊しています。



▲通信使の行程図 「藤沢」の名前がある

通信使が宿泊した宿には日本の文人が訪れ、書画を交換したり、詩歌に興じたりもしました。そんな国際交流が、江戸時代の藤沢を舞台に行われていたのです。

朝鮮通信使と藤沢

通信使は国賓待遇の使節でしたので、大名と同じに宿場の本陣に宿泊しました。藤沢宿ではいまの市民病院と藤沢公民館の中間付近にあった「蒔田本陣」が宿泊場所でした。

残念ながら蒔田本陣の遺構はまったく残っておらず、国道1号線沿いに教育委員会が建てた表示板



▲蒔田本陣跡表示板

があるだけです。

残されているのは文書です。藤沢宿周辺の役人などが通信使の接待のために記録した文書には、調達した食材や警備の配置などが詳細に記録されています。これを見ると、通信使の受け入れが当時としては一大事業だったことがわかります。

一方、通信使側の記録では、1719（享保4）年の通信使に随行した申維翰の「海游録」に、藤沢についてのこんなエピソードが出てきます。

（藤沢宿を）早く出発して行くこと10余里。
樹陰を過ぎるごとに倭人が蜜柑の枝を折って行列に投じてくれた。皮をむいて噛むと香しい果汁が湧いた喉をうるおし、五感がやわらいだ。
（「海游録」平凡社・東洋文庫版より）

豪華なもてなしではありません。ですが旅に疲れた通信使の一行には、差し入れられた蜜柑が何よりのご馳走だったのでしょう。



江戸時代の藤沢で、異国の使者と町人や農民のこんな交流もあったのです。豪華なもてなしよりも、私はこの蜜柑の逸話に心が和む思いがします。

ふじさわ宿交流館

藤沢が通信使の宿泊地であり江戸時代の国際交流の場だったということは、必ずしも知られてきませんでした。蒔田本陣の遺構や通信使の書いた書画など、形あるものが残っていなかったこともその理由です。

ですが、藤沢市と韓国・保寧市が友好都市となったことなどを契機に、ぜひ藤沢に通信使の足跡を示すものを作りたいという声が生まれてきました。

蒔田本陣跡を示す標識には、ようやく「この場所に朝鮮通信使も宿泊した」という記載が加えられました。

そして今年の4月、遊行寺の門前に、藤沢宿の歴史や文化に親しむための施設である「ふじさわ宿交流館」がオープンしました。



▲ふじさわ宿交流館

交流館の多目的ホールには、朝鮮通信使の絵図とその解説が壁の一面を使って展示されました。交流館にとって通信使の展示は、大きな目的のひとつです。

日本と韓国・朝鮮とのつながりに思いを寄せるみなさんの願いが、ようやく実を結んだのです。

今後、保寧市の代表団が来藤した際には、この場所が式典などにも使われることになるかもしれません。

学校での地域教材として、ぜひ藤沢に日本と韓国・朝鮮との友好の足跡があることを取り上げてほしいと思います。

こんな歴史もあったのだという事実は、藤沢の子どもたちに、日本と韓国・朝鮮の未来への展望を示すことになるのではないのでしょうか。



▲交流館の朝鮮通信使の展示パネル

人と人はつながろう

私は朝鮮通信使の意義は、けっして荘厳な行列だけにあるのだとは思いません。

文禄・慶長の役で、朝鮮全土は破壊し尽くされました。政権が豊臣から徳川に移ったと言っても、朝鮮の人々の心には日本への拭いがたい憎悪や不信が蔓延していました。

通信使が使わされた発端も、文禄・慶長の役の際に日本に連れ去られた人々を帰還させるための戦後処理だったのです。

両国の関係改善は、並大抵のことではありませんでした。ですが多くの人々の、時には命を賭した努力によって、憎悪と不信は「信義を通ずる」関係に変わっていきます。朝鮮通信使は友好の使者に姿を変えました。

その信頼確立に向けた努力の歴史にこそ、私は朝鮮通信使の意義があると思うのです。

いま、日本と韓国・朝鮮との政治的な関係はけっして良好なものとは言えません。ようやく規制法が成立しましたが、在日韓国・朝鮮人の人たちに醜悪な言葉を投げつける「ヘイト・スピーチ」もいまだ後を絶ちません。

ですがそんな時だからこそ、「人」と「人」はつながりたいと思うのです。

今年の1月26日、日本と韓国の市民団体が共同で朝鮮通信使をユネスコの世界記憶遺産に登録申請する協定に調印しました。

その申請書には、こう書かれています。

（朝鮮通信使には）悲惨な戦争を経験した両国が平和の時代を構築、維持していく方法と知恵が凝縮されている。

朝鮮通信使の歴史に学び、この藤沢からもぜひ平和と信頼を発信していきたいと心から願っています。